

に「建学の精神」の持続と浸透は、日々の私たちの「運動 ‘movement’」でなくてはなりません。漕ぐのを止まれば、倒れる自転車のようなものなのです。この123年に渡って、関西学院が教育機関として存続できたのは、その歩みに遅速はあるものの、先人たちが絶えず漕ぎ続けたからなのです。

ところで、「建学の精神」の役割は、関西学院という教育機関だけのことではありません。実は、そこに属する人びとすべての日頃の生き方にも通じるものなのです。人には生まれたときから与えられた「賜物」「天分」「才能」があります。私たちは自分だけの内なる「建学の精神」を見つける必要があります。しかし、加えて、それらを開花させるには、日々の私たちの絶え間のない「運動 ‘movement’」が必要なのです。まさに「高貴な粘り ‘Noble Stubbornness’」が求められているのです。今からでも遅くありません。一緒にすぐにでも始めましょう。

(学長)

---

## 神戸三田キャンパスと建学の精神

松 木 真 一

神戸三田キャンパスの理工学部と総合政策学部は、今年も合わせて1100名を超える新入生を迎えました。彼ら新入生たちは西宮のキャンパスの新入生とともに関学大生として新しく歩み始め、もう1ヶ月半が過ぎました。関学唯一の理系・理工学部は現代科学技術文明の最先端で研究研鑽を通して、人類の進歩に貢献しようとしています。総合政策学部は現代の日本・世界の山積みの課題難題と向き合い、現実的実践的な解決の道を探求し続けています。私たちの直面している現況—この国が、激しく揺れ、こわれ始め解体し始めていくような不安感と危機的な状況のただ中で、両学部生に求められている期待は他学部生同様、限りなしです。新入生がこのキャンパスでこれから学び研鑽する意義は、この意味で絶大なものです。

学び研鑽とはいっても、それはただ漠然としたものでも知識や業績の積み重ねでもありません。そこには終始、一つの明確な理念が貫かれています。建学の精神として簡潔に表された「マスタリー・フォア・サービス」がそれです。この標語は、

関学の長い歴史の中で在学生、同窓生、そして多くの人々に多大の影響を与えてきた素晴らしい影響史を生み出しています。今もそうです。その理由は、この語が単なる人道的スローガンにとどまらず、一層深い宗教的深みを持った語であるから、と思えてなりません。人の心の深みにまで届き、社会や世界や歴史の根底にまで届き、その根底から文字通り「仕え」、そのために学び「熟達」する、という意味で。

しばしば引き合いに出す比喻ですが、夏の夜に親戚の田舎の海辺を散歩していた時のことです。民家の並ぶ明るい場所から、海に突き出ている突堤を暗い沖のほうまで歩いてふと見上げると、満天の星が美しく輝きわたっている。再び戻って民家の明るいところで見上げても、もうあの星空はない。つまり、自分の足もとや周辺が暗くなればなるほど、かえって見えてくるものがあります。逆に自分や周辺が明るいほど、見えなくなるのです。

私たち日本人は今、大変な状況の中にいます。仮設住宅や避難場所で生活している方がた、被災された方がたは、今もなおつらい喪失感と虚無感に満ちた暗闇の中におられます。共に分かち合い共有する中で、しかしそれだからこそ明るい可能性を信じて、勇気を出して力強く前進して行きたい、と願わざるを得ません。一人ひとりが関学で学ぶ学びと研鑽を通して、直面する現状の暗さの底のところから仕え、また地域や社会、周辺のあるいは身近な人たち、そして自分自身の心にもしばしば重い影を落とす闇のところから支えあい仕えあい、そのために学びあう、そのような深い研鑽と活躍を心から願っています。「この世にあって星のように輝いて」（フィリピの信徒への手紙2章15節）活躍し続けてほしい、と祈っています。

（理工学部宗教主事）

---

## 聖和の伝統を受け継いで

～その方<sup>ほう</sup>、祈って、考えて、責任もって～

島 田 ミ チ コ

関西学院と聖和大学が合併し、教育学部が発足して今年で4年目を迎え、1年生から4年生まですべて関西学院大学教育学部の学生となりました。この教育学部が